



# 紙にできること

昔、ナイル河を遡行する旅をしたこと  
がある。

一九七八年のことだ。

ナイルは大河である。遙か南のヴィイクトリア湖から来る白ナイルと東のエチオピアから来る青ナイルがスレダムの首都カルトウームで合流する（水の色が違うからそれぞれこの名がついた）。

ぼくは白ナイルを上る船で源流を目指した。河は実は狭い。そこを六隻の船をきつちり束ねてエンジンのある船が押してゆくという不思議な船隊だった。の時は十四日かかった（シベリア鉄道の倍だ）。最長は三週間で、食べるものがなくなつて難儀したと聞いた。

この船旅、右を見ても左を見ても湿原

に一種類の草ばかり。高さ二、三メートルで先端は花火のような房になつており、茎は一本。葉はない。

これがパピルス。

茎の中間部分を切り出して、細かく裂き、水に漬けて少し発酵させて粘度を増し、纖維を縦横に重ねて槌で叩く。これを乾かすといわゆるパピルスになる。文字が書ける。この技法が二十世紀になつて再現され、今のエジプトでは象形文字を書いたパピルスを土産物店で売つている。文字の起源は帳簿と呪術だとぼくは考える。

メソポタミアでは穀物などを入れた壺の蓋に紐を掛け、それを粘土の塊で封印して楔形文字で内容を書いて印章を押した。中国では甲骨を火で焼いてできた割れ目で占いをし、その結果を裏側に文字で書き込んだ。今は口の意である字（「口」）はもともとは呪符を入れた箱だと白川静先生は言われる。

文字は空中に消えてしまう言葉を固定する。そのためには何か媒体が必要で、石や粘土、パピルス（死者の書）、羊皮紙（死海文書）などが利用された。横に繋いで巻けば巻子本（スクロール）になるし、ページごとに切つて製本すれば冊子本（コデックス）になる。ページ



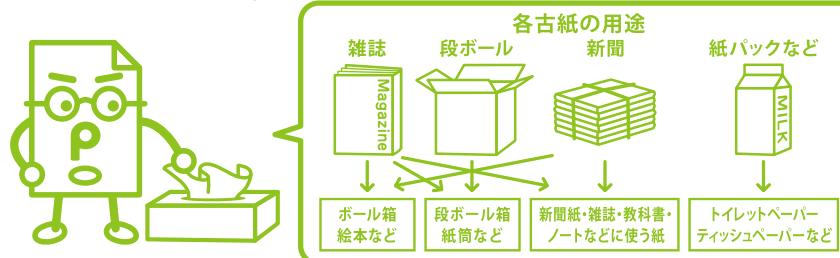
いけざわ・なつき●作家。  
1945年、北海道生まれ。  
二十代から世界各地を旅する。88年「スタイル・ライフ」で芥川賞、92年『母なる自然のおっぱい』で読売文学賞、93年『マシアス・ギリの失脚』で谷崎潤一郎賞、2000年『花を運ぶ妹』で毎日出版文化賞を受賞。詩、小説、随筆、翻訳、世界文学全集の編纂などを手掛けた。朝日新聞で連載された小説『また会う日まで』は夏頃刊行予定。

## ペーパー君のつ・ぶ・や・き

活動

### 回収された紙、次は何になる？

段ボールはまた段ボールに。紙パックはティッシュやトイレットペーパーに。そうやって、一度使われた紙は回収されて、また新しい紙へと生まれ変わっていくんです。あなたが毎日いろんな場面で使っている紙とも、まだどこかで会えるかも。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。 <http://kamitsubu.com/>

次回は 5/5・12 ゴールデンウィーク特大号です。